

令和2年度メルマガみやぎ 日本遺産特集 バックナンバー

令和2年度

※特集タイトルをクリックすると、読みたい記事にジャンプします。

No.	配信日	特集タイトル
1	令和2年 4月24日(金)	日本遺産、旅の目的はストーリー一体感へ
2	令和2年 5月22日(金)	戦国武将・伊達政宗と仙台城
3	令和2年 6月26日(金)	仙台城を知る手掛がかり『鳳凰図屏風』
4	令和2年 7月31日(金)	仙台藩歴代藩主の祈りとお抱え刀工の技 ・鹽竈神社歴代藩主奉納太刀
5	令和2年 8月21日(金)	特別史跡多賀城跡
6	令和2年 9月25日(金)	仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図
7	令和2年10月30日(金)	仙台藩歴代藩主の御休所・勝画楼
8	令和2年11月20日(金)	神と神楽のお引っ越し
9	令和2年12月25日(金)	日本遺産「みちのく GOLD 浪漫」—黄金の国ジパング、産金はじまりの地をたどる— 日本“金”発祥の聖地・涌谷町
10	令和3年 1月22日(金)	日本遺産「みちのく GOLD 浪漫」—黄金の国ジパング、産金はじまりの地をたどる— 「みちのくの“金”」
11	令和3年 2月26日(金)	日本遺産「みちのく GOLD 浪漫」—黄金の国ジパング、産金はじまりの地をたどる— 金採取の移り変わり
12	令和3年 3月19日(金)	地域と文化財をつなぐストーリー

■ 1 日本遺産、旅の目的はストーリー体感へ ■

大河ドラマが面白いのは、明智光秀など有名な主人公の生涯だけでなく、主人公がどんな城や建物に住んでいたか、ストーリーから複数の文化財を繋いで語る地域の歴史文化ストーリーを“日本遺産”として国が認定を始めました。宮城県では「政宗が育んだ“伊達”な文化」と「みちのく GOLD 浪漫～黄金の国ジパング、産金はじまりの地をたどる」の2件が認定されています。前者の舞台は仙台市から松島町で、知名度抜群の伊達政宗公と仙台藩がテーマとなっています。有名な仙台城跡や松島五大堂だけでなく関連する構成文化財を巡ると、旅を通じてストーリーを体感でき、大河ドラマのように政宗公や歴代藩主の考えが分かる気がします。

後者の舞台は涌谷町や気仙沼市などです。宮城県が日本の産金発祥で、東大寺の大仏には涌谷町産の金が使われたことを知っていましたか。黄金山（こがねやま）産金遺跡や鹿折（ししおり）金山跡、気仙沼湾入り口の岬である岩井崎など、産金に関わる文化財群が地域の歴史文化を語っています。

これから定期的に日本遺産の魅力を紹介していきます。今後、新型コロナウイルス感染拡大が収束したあとの旅先の候補として、ぜひ日本遺産をご検討ください。

■ 2 戦国武将・伊達政宗と仙台城 ■

“粋な”ことを表す「伊達（だて）」。なんて呼んだりしますが、この言葉は伊達政宗がその由来の一つと考えられています。戦国武将として誰もが知る伊達政宗公ですが、軍事や政治に名をは馳せただけでなく、まさに伊達（だて）男というべき、時代の先端を行く“粋な”文化人でもありました。その政宗公が仙台を本拠地と決めた際、まず取り組んだのが仙台城の築城です。

仙台城は、築城当時訪れたスペイン使節団の一人が「日本で最良で、最も堅固な城のひとつ」と絶賛したとされていますが、城自体の堅牢さもさることながら、政宗公は建物の内装でもわざわざ京都（上方）から有名な絵師や職人たちを呼び寄せ、豪華絢爛（けんらん）な大広間の障壁画などを作らせています。この絵師や職人たちは、瑞巖寺や大崎八幡宮の造営にも腕を振るい、政宗公の文化政策を後押ししました。

現在、仙台城は建物が火災や解体に遭い、今は石垣や土塁が残るのみですが、本丸跡にある仙台城見聞館では、仙台城本丸床の間の原寸大再現や大広間の1/50 復元模型を見ることができます。また、観瀾亭（松島町）や仙台市博物館では、本丸障壁画の一部が所蔵されています。建物は失われてしまいましたが、現

代でも、それらから城の豪華さを垣間見ることができます。これらの文化財をもとに「政宗が育んだ“伊達な”文化」をたどると、また新しい宮城の魅力が見つげられるかもしれません。

ちなみに「伊達（だて）男」には、たとえば弱者を助けずにはいられないような、男気のある人といった意味もあるそうです。さまざまな不安が絶えない時世ですが、こんな時にこそ、「伊達（だて）な」生き方をしたいものですね。

■ 3 仙台城を知る手掛かり『鳳凰図屏風（ほうおうずびょうぶ）』 ■

「メルマガ・みやぎ」第 817 号で紹介した仙台城は、明治維新後に解体されてしまったため、現代ではに生きる私たちはその姿を見ることはできません。そんな仙台城の往時の姿を偲しのばせる文化財の一つが、日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」構成文化財の『仙台城本丸大広間障壁画鳳凰図（ほうおうず）』（松島町所蔵）です。

『鳳凰図（ほうおうず）』は、仙台藩最初のお抱え絵師であるとなる狩野左京のにとって最盛期の濃絵（だみえ）作品であり、仙台城大広間ので藩主が座するした場所である上段の間を飾りました。、桃山期狩野派による濃絵（だみえ）です。もともとは壁貼りの障壁画でしたが、本丸御殿解体の際に屏風に仕立てられました。仙台城本丸の室内装飾を知る貴重な遺品として、宮城県指定文化財になっています。

『鳳凰図』には、金地に天下が平らかになるときに現れる瑞鳥（ずいちょう：めでたいことが起こる前兆とされる鳥という意味）である 2 羽の鳳凰が大きく描かれており、このうち、向かって右側の脚の蹴爪（けづめ）が発達した方が雄、左側の顔が振り返り口を開けて鳴いている左側が雌と考えられています。絵からは政宗公の覇気に満ちた華やかな政宗の武将としての精神がうかがえます。

当時の仙台城の豪華さ、華やかさを知ることができるものとしては、このほかにも本丸大広間御帳台の障壁画だったとされる「扇面図屏風（せんめんずびょうぶ）」（日本遺産構成文化財 仙台城・若林城に伝わる障壁画、仙台市博物館所蔵）もあります。

所蔵機関の URL 下記ホームページで公開情報を確認の上うえ、ぜひご覧いただき、伊達な文化を実感してもらえればと思います。

■ 4 仙台藩歴代藩主の祈りとお抱え刀工の技 ・鹽竈神社歴代藩主奉納太刀 ■

今回は、塩竈市に伝わる日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」構成文化財を紹介します。

古くから陸奥国一宮として知られる鹽竈（しおがま）神社には、歴代藩主によって太刀が奉納されています。その始まりは、1703（元禄 16）年 5 代藩主伊達吉村（だてよしむら）公の藩主就任に伴い、鹽竈神社左宮・右宮・別宮の三社に 3 振の太刀が奉納されたことから、以来藩主の交代など治世の節目において慣例となりました。記録によれば 13 回、計 39 振の太刀が鹽竈神社に奉納されています。そのうち現存する 35 振の太刀が、1979（昭和 54）年に宮城県指定有形文化財「伊達家歴代藩主奉納糸巻太刀（だてけれきだいはんしゅほうのういとまきたち）」に指定されています。

これらの太刀は、仙台藩のお抱え刀工となった国包（くにかね）一門とその弟子筋にあたる包吉（かねよし）・包蔵（かねくら）などの門流によって製作されました。治世の安泰を祈って歴代藩主が奉納した太刀には、初代国包が復興させた刀剣製作の流派である大和保昌伝（やまとほうしょうでん）の質実剛健な作風を、継承し発展させていった一門とその門流の技術が凝縮されています。鹽竈神社博物館では、毎年初詣にあわせて刀剣を中心とした新春特別展を開催しています。公開情報を確認の上、ぜひご覧いただき、仙台藩歴代藩主の祈りとお抱え刀工の技に触れてみてはいかがでしょうか。

■ 5 特別史跡多賀城跡 ■

国の特別史跡に指定されている多賀城は、奈良・平安時代に律令（りつりょう）国家による東北統治と北方外交の拠点として建てられた役所です。そして福岡県の大宰府も九州統治と唐や新羅との外交という似た役割を担っていました。

「東の多賀城」と「西の大宰府」、この二つの運営に大きく関わった上級官人がいます。それが『万葉集』編者の一人、大伴家持（おおとものやかもち）です。

【家持と防人（さきもり）】

家持の父は歌人、大伴旅人（おおとものたびと）。旅人が大宰帥（だざいのそち（長官））だった時期、幼少の家持も大宰府で過ごしたと考えられています。その後、家持は兵部少輔（ひょうぶしょうゆう）として難波津（現在の大阪市）で北九州沿岸防衛にあたる防人の閲兵（えっぺい）・交代業務に就きました。『万葉集』収録の防人歌の多くはこの頃、家持によって選ばれ、自身も防人に関する歌を詠んでいます。

【多賀城に防人？】

実は多賀城にも防人と似た「鎮兵（ちんぺい）」という辺境防備の兵がいました。そして最晩年、家持は鎮兵とも関わりを持ちます。782（延暦元）年、家持は陸奥按察使（あぜち）鎮守将軍、翌々年には持節征東（じせつせいとう）将軍に任じられ、勤務地が多賀城になるのです。彼が実際に任地に赴いたかどうかは説が分かれますが、天皇から節刀をたまわる持節征東将軍ですから、きっと多賀

城の地を踏んだはず！…ですが、残念なことに家持が鎮兵を詠うことはありませんでした。759（天平宝字 3）年以後、彼の歌は記録から姿を消します。歌人として長い沈黙のまま、785（延暦 4）年、家持は多賀城において 68 歳で世を去ったと考えられています（…きっと）。

【多賀城は今】

現在、多賀城跡では礎石や基壇が復元され、外郭南門の復元も始まりました。家持も見たであろう多賀城の景色…爽やかな風とともに樹木に囲まれた小高い丘の上にある多賀城跡で感じてみませんか。

■ 6 仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図 ■

仙台城の図面集、日本遺産構成文化財「仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図」

「仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図」（仙台市博物館蔵）は、仙台藩の御大工（藩お抱えの大工）であった千田家（ちだけ）に伝わりました。名前のとおり、仙台城の本丸・二の丸と、江戸にあった仙台藩上屋敷の主要な建物の立面図をまとめた資料で、仙台市指定有形文化財になっています。

絵図の制作経緯は明らかではありませんが、千田家は仙台城の修復に携わっていたことから、修繕の計画図か、後世の修繕に備えた現状の記録とも考えられます。図面を見みると、正面と側面を連続して描き、軒先の一部のみ断面を描くなど、現代の建築図面とは異なる表現がなされています。建具や欄間（らんま）、妻飾（つまかざり）などの装飾も細かく描かれており、今は失われた仙台城の威容をうかがい知ることができます。

この絵図が 11 月 23 日（月曜日）まで、東北歴史博物館（多賀城市高崎 1 丁目 1）で開催される特別展「伝わるかたち／伝えるわざ —— 伝達と変容の日本建築」において展示されます。この他ほか、宮城県指定有形文化財「鳳凰図屏風（ほうおうずびょうぶ）」や重要文化財「瑞巖寺本堂障壁画」、大崎八幡宮の彩色組物模型など、日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」の構成文化財及および関連資料も多数展示出陳されます。組物や彫物、障壁画の空間など、建築のさまざまな「かたち」がどのように継承されたのか。建築の「かたち」を伝えるために、どのような「わざ」が工夫されてきたのか。建築の部材や障壁画、模型や図面などを通して紹介する、日本建築史の展覧会です。開催情報をご確認の上、ぜひご観覧ください。

■ 7 仙台藩歴代藩主の御休所・勝画楼 ■

陸奥国一之宮・鹽竈神社が鎮座する塩釜市一森山の東端に、崖地にせり出す形で建てられている木造建築物が「勝画楼（しょうがろう）」です。平成 30 年に

日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」の構成文化財に追加登録されるとともに、塩竈市有形文化財(建造物)に指定されました。

勝画楼は、仙台藩の歴代藩主が鹽竈神社を参拝する際、着替えや休憩の場所(御休所)として使用した建物です。鹽竈神社別当寺であった法蓮寺の客殿を前身とし、成立は江戸中期まで遡ります。

工法は、崖地に柱を立てて床を高くする「懸造(かけづくり)けづくり」です。が取り入れられており、名前は、五代藩主の伊達吉村公が、ここからの眺望を「画に勝る」として「勝画楼」と名付けたとされます。

明治天皇の東北巡幸では、行在所(宿泊所)として使われ、明治11年に民間に払い下げられて以降は、料亭として市民に親しまれました。与謝野鉄幹、北原白秋などの文化人、皇族、外国大使などが利用した記録も残ります。

終戦後、勝画楼は経営不振により鹽竈神社に譲渡されましたが、昭和40年代には使用されなくなり、老朽化が進みました。東日本大震災後に解体が検討されたものの、保存を願う市民の声が追い風となり、平成29年、行政の手で保存していくことが決定しました。塩竈市に建物を譲渡されました。現在、塩竈市では、公開・活用に向けた検討作業を進めています。

◎今回紹介した「勝画楼」ペア招待チケットを10組にプレゼントします。

詳しくは、下記プレゼントコーナーをご覧ください。

■ 8 神と神楽のお引越し ■

国宝、大崎八幡宮。仙台にあるのになぜ“大崎”の名が付つくのかといえば、その由来は中世にまで遡ります。当時、陸奥大崎五郡(志田郡、玉造郡、加美郡、遠田郡、栗原郡)は大崎氏が治めていましたが、その大崎氏が崇敬した神社が世に大崎八幡と呼ばれました。

時は経ち、伊達氏がこの地を支配するようになると、伊達氏のご神体を岩出山に移遷し、またその後、本拠地を仙台に移したことに伴って、仙台城からみた乾の方角(北西・仙台市青葉区八幡)に移遷しました。これが現在の大崎八幡宮とされています。

さて、伊達氏とともに仙台に来たのはご神体だけではありませんでした。神に奉納するための踊り、神楽も一緒に遷ってきたのです。これを現代に伝えるのが、宮城県指定無形民俗文化財「大崎八幡宮の能神楽」。この神楽の演目や台詞は、仙台に伝わる他の神楽とは異なる特徴を有しており、驚くべきことに、大崎五郡で伝えられてきた神楽との共通点が指摘されています。人から人へと伝えられてきた神楽が、数百年もの時を経て、なおその特徴を遺しているなんて、感慨深いですね。

毎年秋の例大祭（9月14日）の宵宮（よいみや）で奉納される「大崎八幡宮の能この神楽」。来年は遠く中世にまで思いを馳せながら鑑賞するのも一興かもしれません。

■ 9 日本遺産「みちのく GOLD 浪漫」—黄金の国ジパング、産金はいじまりの地をたどる— 日本“金”発祥の聖地・涌谷町 ■

みなさんは、日本で初めて黄金が見つかった場所が宮城県にあるのを知っていますか。

古代の日本国内では黄金は採取できないと考えられており、近隣諸国からの輸入に頼っていました。749（天平21）年2月、「みちのくで黄金が産出した」との報が奈良の都に届くとき、聖武天皇は、当時進すすめていた東大寺大仏の造営にその黄金を使用。大仏が完成すると確信した天皇は、完成すると神仏と神の双方に感謝し、年号を「天平」から「天平感宝」へと改元する国家的慶事となりました。

この日本の“金”発祥の聖地が、仙台から車で1時間、涌谷町の天平ろまん館がある場所で、黄金山産金遺跡として国指定史跡となっています。今なお砂金が取れる沢辺に、神々へ感謝した黄金山神社と仏に感謝した天平の仏堂跡がただずみ、静穏な空間をつくり出しています。

日本の黄金の歴史は、今から約1,270年前、沢の中でキラッと光った小さな砂金の輝きから始まったのです。その後、産金地は三陸沿岸地域にも拡大し、各地から集められた砂金は、遣唐使等の旅費として外交・貿易の資金となります。こうして産金国・日本として歩み始ははじめ、岩手県平泉町の中尊寺金色堂をモデルに「黄金の島ジパング」のイメージが形つくられていきました。

天平ろまん館には、日本初の産金について紹介する歴史館と共に、砂金採り体験施設があります。皆さんも、一粒の砂金のきらめきから始まる物語に浪漫を感じてみませんか。

■ 10 日本遺産「みちのく GOLD 浪漫」—黄金の国ジパング、産金はいじまりの地をたどる— 「みちのくの“金”」 ■

みちのくの“金”。この言葉から真っ先に思い浮かぶのは、岩手県平泉町の中尊寺金色堂ではないでしょうか。平安時代、造営主である奥州藤原氏は、争いのない平和で平等な世を願い、世の中を明るく照らす理想郷を“金”によって具現化しました。そんなみちのくの“金”の象徴とも言える金色堂、そして奥州藤原氏の黄金文化を支えていたのは、北上山地や三陸沿岸で採れた「本吉金」「気仙金」でした。

「本吉金」「気仙金」の主産地は、気仙沼市と南三陸町にまたがってそびえ立つ田東山(たつがねさん)周辺の川や沢でした。田東山では標高 512 メートルの高さがあり、三陸沿岸を広く見渡すことができます。毎年 5 月ごろには山一面をツツジの花が彩ります。その景観の良さから人気の観光スポットとなっていますが、もともとは奥州藤原氏第 3 代の秀衡(ひでひら)が深く信仰した山です。寂光寺(じゃっこうじ)や清水寺(せいすいじ)、金峰寺(きんぷじ)など多くの寺院が秀衡の手により建立されたと伝えられています。山頂には経塚と呼ばれる仏教の経典を埋めた塚が、麓から山中にはかつて修行のために田東山を目指した僧侶が通った「東の行場」と呼ばれる登山道が残り、仏教信仰の聖地メッカとしての田東山の姿が見みえてきます。“金”がほとんど採れなくなった現在でも、かつてみちのくの“金”がつないだ文化や信仰、東北の内陸部と沿岸部のつながりは連綿と伝えられ、生き続けています。

(注：田東山は、現在冬季閉鎖中です。)

■ 11 日本遺産「みちのく GOLD 浪漫」—黄金の国ジパング、産金はじまりの地をたどる— 金採取の移り変わり ■

奈良時代の砂金採りから始まった、みちのくの金採取。戦国時代になると、鉱石から金を取り出す技術が確立され、砂金採りに加えて金鉱山開発が始まりました。豊臣秀吉や伊達政宗など時の権力者は、金山管理に力を入れ、自身が信頼する者を奉行として金山に派遣し、金採取のための許可書(金山御本判(きんざんごほんばん))を発行させ、金山管理に力を入れました。

そして明治時代、掘削機などの最新技術の導入によって各地で大規模な金鉱山開発が進み、日本では空前のゴールドラッシュが起きました。その熱気の中、気仙沼市北部に位置する鹿折金山(ししおりきんざん)では、明治 37(1904)年に重さ 2.25 キロ・含有率 83 パーセントという日本最大の自然金「モンスターゴールド」を産出。同年開催のセントルイス万国博覧会に出品され、世界を驚嘆させました。その翌年には、鹿折金山の影響を受けて気仙沼市南部の丘陵地にそびえる大谷鉱山(おおやこうざん)で採掘が始まります。最盛期の昭和 10(1935)年頃には年間約 1 トンもの金を産出し、巨大精錬所は不夜城と化しました。周辺には一大鉱山町が形成され、数多くの従業員とその家族が暮らしていました。幼少期を鉱山町で暮らした地元ガイドさんの決まり文句は「鉱山の子どもは弁当のおかずの数が多いって羨ましがられたんだ」—当時の鉱山の繁栄ぶりを伝える一言ではないでしょうか。

気仙沼市の二つの金鉱山はすでに閉山となり、普段は静寂に包まれた空間となっていますが、資料館に残された数々の道具は、金採取の歴史とともに、金への憧れや金鉱山の賑わいを今に伝えてくれます。

■ 12 地域と文化財をつなぐストーリー ■

どの地域にも、何かしら神社やお寺、史跡などがあります。そして、今も民俗芸能や昔ながらの街並み、伝統的な農業や漁業を営む風景が残る地域も多くあります。

これらのなかには保護して将来に残すべき「文化財」として指定や登録されたものもありますが、一方で、由緒や歴史どころか存在すら一般的に知られず、価値や観光や教育資源としての魅力が伝わらないまま、消滅の危機に晒されているものも多くあります。

「日本遺産」は、指定や登録された文化財だけでなく、地域の特色ある歴史文化を示すものをつないで語る歴史文化ストーリーとして認定し、地域活性化に役立てようと平成27年に始まりました。文化財など一つ一つが日本遺産ストーリーの中で再発見されることで、特色ある地域を後世に残すだけでなく、観光やまちづくりに貢献することを期待しています。

今まで紹介してきた宮城県の2つの日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」と「みちのく GOLD 浪漫～黄金の国ジパング、産金はじめりの地をたどる」では、前者は仙台市・多賀城市・塩竈市・松島町にある伊達政宗と仙台藩の文化に係わる文化財群で構成されたストーリー、後者は涌谷町・南三陸町・気仙沼市と岩手県平泉町・陸前高田市にあるみちのくの産金に係わる文化財で構成されたストーリーとなっています。

日本遺産を通じて、地域の「再発見」から持続可能な地域の活性化、そしてまた文化財の保存と活用という循環につながることを期待します。